ネクタイについて

神田美年子

一、はしがき
二、歴史と変遷
三、我が国での歴史
四、分類と種類
五、製造法
六、織物の引張方向による伸びの比較
七、ネクタイの捩れ
八、結び

一、はしがき

今日の服飾界の流行を見るに、女子がネクタイ（ダービー・タイ）を結んでいるのは特殊なデザインを除いては殆んど見受けられなく、僅かに女学生の制服の一部に用いられているセーラー服等にその面影をとどめているに過ぎない。一方男子にとつてネクタイは服飾品の最高の位置を譲らないばかりか、ますます関心が強められて行く今日、ネクタイの有する歴史、我が国に於ける発達過程を調べ、分類と種類について述べ、更に良質なネクタイとして具備すべき条件を考察し、裁断法・縫製法等に就いて研究した。

二、歴史と変遷

ネクタイはネック（頸）のまわりに巻くタイ（結目）の意味で略してタイと呼ばれているが、その最初はタイではなくてスカーフ又はネッカチーフのような布であつた。

紀元一世紀のローマのトラヤヌ帝の兵隊の絵を見ると、今日の女学生が制服にネッカチーフを結んでいるような恰好で、柔い布を頸の廻りに巻いているが、その頃の兵隊は故郷を遠く離れて異郷に派遣される時、首に巻いている布で故郷を偲んだということであるが、北方の寒い国々では、それが装飾の意味を離れて保温のための実用的な首巻きに変化したものと見らる。現在に至るまでフランス語では狐の襟巻とネクタイとが同一の言葉（クラヴァット）で呼ばれているのはこんなところに起因するのではなかろうかと思われる。他説によるとオーストリーのクロアチア（今日ではユーゴースラビアの一聯邦）の兵隊がフランスのルイ十四世（一六三八～一七一五年）に仕えるためにパリにやつて来た時、将兵達は頸のまわりに鮮やかな色の布を巻いていて、その先に刀傷除けの護符をつけていたというので、本来はお護符を下げるための布であつたともいわれている。当時のパリジャンにその柔い感じが人気を呼び、忽ち流行となつたのでクロアチァ（フランス語ではクロアートCroate）に因んでクラヴァット（Crovate）と呼ばれるようになつたといわれている。（Krawatte説）

ルイ十四世はこのクラヴァットを白モスリンの布に刺繍で緑飾りをしたのを、チョッキの胸のあたりまで垂らし、顎の下には蝶型に大きく結んだ色リボンをつけた。（第1図）これがだんだん王族や貴族の間に流行してそ

れらの人々の専有物となつた。それは丁度今日のスカーフのようなもので三角形（或は四角の布を三角に折つたもの）で頸のまわりを一回まわしてから結んでいた。ルイ十四世は軍隊の制服にもこのクラヴァットを用いさせ特にクラヴァット聯隊と名付けたが、たまたまこの軍隊が夜襲に会い、兵士達は大急ぎで軍服をひつかけ、無雑作にスカーフを結んだまゝ戦つたところ、この戦いに勝つことが出来た。此の軍隊がパリを戦捷行軍すると忽ちにクラヴァットの人気は高くなつて流行に拍車をかけたのである。そこでそのような無雑作な結び方を当時の戦場の名をとつてスタイン・カークと呼ぶようになつた。この結び方はスカーフを花結びに結んで房々と垂らし、片方の端をコートの上から六番目のボタン・ホールに通すのである。（第2図）

ルイ十五世（一七一〇～一七七四年）の時代から西欧の装飾美術はロココ式（繊細華麗な様式）となり、続いて十八世紀から十九世紀にかけて芸術上のロマン主義が一世を風靡し、男子の服装はチョッキの色や型が流行の先頭に立つたのでクラヴァットの流行もチョッキとの釣合を主に考えられることとなつた。即ちチョッキの胸開きが広かつたので薄い生地にレースなどで襞をとつたり、フリルのような豪華なものが用いられ、フランス革命（一七八九～一七九九年）の起るまで続けられていた。何時の場合でもそうであるが戦後の華美な気風が流行し、王党の貴公子たちは競つて広巾の派手なスカーフを身につけた。それが純白から色物へと移り、中でも非常に気障な振舞をする社交界の伊達者が、インクロヤブル（信じがたい、どうだか判らない）という語を流行せたので彼等の結んでいた派手なスカーフのことをインクロヤブル式と呼ぶようになつた。（第3図）

十九世紀に入ると華美なスカーフやフリルは廃れはじめて、一般にはスマートな細長い布を一まわり頸に巻い

てその端を前で結び、カラーとの調和をとるようになつたがそれでもスカーフを首に巻いて喜んでいる人達も一部にはいた。しかしそれも派手な色はだんだん姿を消して白か黒の二色になつた。

此の頃になると今までフランスが中心であつたのが、そろそろイギリスへと移りはじめたが名称はフランス語のまゝで呼ばれていた。一八〇〇年代になると、男子の流行はだんだんイギリスへ移つて行つたのでイギリスではネック・クロス（頸に巻く布）という言葉が使い出されたが、その間徐々に巾が狭くなつて紐の形になつて来たのでネック・タイと呼ばれるようになり、更にそれが今日のネクタイになつたのである。イギリスでは当時（一七七八～一八四〇年）貴公子で社交界を牛耳つていたジョージ・ブライアン・ブランメルはその頃の軍隊が使つていた固いタイを真似て強く糊付けしたものを流行させた。これはストック・タイ（Stock・Tie）と呼ばれ絹・皮等で作られた巾の広いネクタイで頸に巻きその端を前で小さく結ぶか、或は後でバックル留めにする。これは当時女子の間にも流行し、乗馬の際などに用いられた。（第4図）

十九世紀の初期には従来の固い高いカラーに代つて低いカラーが現われたので、ネクタイも自から巾が狭くなつてボー・タイ（Bowは蝶結びという意味）が出はじめ、続いて先端を下に垂らすアスコット・タイ（Ascot Tie）が流行した。Bow も Ascot も最初は一度頸に巻いてから前で結ぶ式であつたのが、其の後変じて今日のように一重だけのものとなつた。

一九三〇年頃には Bow Tie の方はだんだん流行らなくなつて、フランスに作りつけのタイが現われた。これは紐式のタイを結ぶ手間を省いて前以つて前面の結び目は縫付けでつくられ、紐の両端を頸の後で留めるるよう

にしたもので英語ではタイ・フロント（Tie Front）と呼ばれ、フランスでは従来の首巻きを兼ねていたスカーフに対し、これはカラー（頸のまわりにつける飾り）の一種だというので「カラー式クラヴァット」と呼ばれた。この作りつけのタイは前世紀後半の一般人向きのタイとして比較的永く使用されていたが、スタイルや製法にも色々の変化があつた。即ち初期にはタイの前部の表裏を変えておき、特殊の金具でバンドを外さずに表裏の色を変えて使えるのである。紐式のタイをイギリスでダービーとかアスコットなどと呼ばれているのは其の頃の競馬は一種の社交場であつて競馬に行く紳士はシルク・ハットにモーニングを着用したものであるから、その人達によつて結ばれたネクタイが自から呼名となつたのであろうと思われる。その後作りつけのタイに芯が入るようになつた。これをフランスではレガート（Régatto）イギリスではリゲート（Regatta）と呼ばれているが、レガートとはボート・レースのことを意味するので恐らくボート・レースをする人がつけているネクタイに似ていたためであろうと考えられる。一九五四年のパリのコレクションにいろいろの形のネクタイが婦人服に使われていたが、彼の有名なデザイナー、ジャック・ファット（Jacques Fath）などのデザインしたネクタイのある服の類にはレガートの名がつけられていた。（第5図）

今日の下げネクタイは大体一八八〇年頃からと推定されるが――フランスの一九二六年版の「家庭全書」（ラルース版）のクラヴァットの項目に今日の下げネクタイは出ていなくて蝶結びとレガート、アスコットの結び方が記されている――その頃用いていた人は稀で余程遅れていたことが想像される。又このネクタイが英語でフォア・イン・ハンド（Four in Hand）と呼んでいるがこれは四つを手にするということで、云い換えると四頭立

の馬車を乗り廻す人々のクラブがロンドンにあつてそのクラブに入つている人々が社交界に活躍する時結んでいたのでこの名があるのではないかと想像されるが、一説にはネクタイの結び下げた長さが掌の四倍位あるところからこの名があるともいわれている。一般の人々に用いられ出したのは割合に新しく、今まで結び付けだつたのがこの頃から自然に自分の手で結ぶようになつた。

三、我が国での歴史

我が国に於けるネクタイの歴史は定かではないが、戦国時代の中頃、宣教師が渡来しているところから推定して見ると、この頃既にネクタイは何人かの人の目にふれていることと思われる。明治四年、伊藤博文が洋行する時の写真にはちやんと蝶ネクタイを結んでいるが、一般に流行しだしたのは明治二十八年頃からで、主として実業家連が洋服を着用しはじめた頃からである。この頃のネクタイは結び

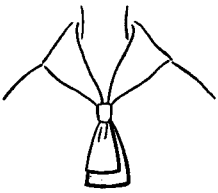
第1図

第2図

第3図

第4図

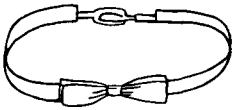
第5図



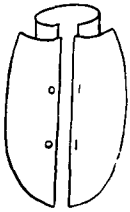
付けのネクタイであつて（第6図）、すべて背部で金具により、はめたり、はずしたりすることが出来る仕掛けになつていた。これは当時のカラーとの関係によつて生ずる当然の成り行きで、即ち当時の大衆はワイシャツを着用せずにメリヤス・シャツの上に立カラーや折カラーの固いものをつけ、ネクタイをはめたものである。それで如何にしてメリヤス・シャツにハード・カラーをくつつけるかと工夫した結果「イカ胸」（第7図）と称する胸あてが考案された。丁度背広の三つ揃にはこのイカ胸の流行は便利であつたのである。即ち「イカ胸」はチョッキの中にかくれるので後釦と前釦によつてハード・カラーを連続させる仕組になつている。勿論カラーもイカ胸もキャラコ地に糊を固めて仕上げたハードのものであつた。このハード・カラーに結び付けネクタイを背部ではめるだけでよかつたのである。

又その頃はネクタイの創生期であるから材料とてもなく、ネクタイの生地は女性の帯を解体して作られたものが多かつたが、一本の帯から出来るだけ多くのネクタイをとることのみを考えていたので生地の裁断等は全く乱暴なものであつたが、それでも文句なしに得意顔で用いられていたのだから可笑しいものである。主として蝶ネクタイが用いられ、結んだ時両端がぶら下つて「又」の字にみえるので「又の字」とも呼ばれていた。

第6図

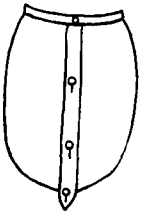


蝶型ネクタイ



カラー付イカ胸

第7図



イカ胸

明治三十年頃になると西陣の帯機屋が特にネクタイ専門の生地の別織に成功したのが動機で八王子・桐生・足利・佐野などの両毛地方でネクタイ生地の製織を専業とする機屋が出来て来た。東京では日暮里を中心としてさかんにネクタイ生地の製織が始められた。当時は勿論正絹ばかりであつた。

明治四十二年頃には先端の織り方を変えた織り出し付ダービーが人気を呼んだが、そのうち紋織ネクタイが稍重苦しく感じ出され、友禅生地を利用しだしたが、ネクタイ地として特別に染められるのではなくて男子の羽織裏地とか袋物用の小紋地等、ネクタイ向きの柄を選んで縫製したものである。そのうち、これでは満足出来なくなつて、ネクタイらしい独立の図案を考案し、ネクタイ独特の別染が出来たのでこれは全く紋織ネクタイを圧倒することとなつた。然し何といつてもまだまだの時代であつたからネクタイとは呼ばずに「襟飾り」と呼ばれ、店の看板などにも「襟飾り」と書かれていたし、その頃ネクタイについてのナンセンスは色々と伝えられている。例えばダービー型のタイを蝶型に結んだり、蝶型の結びが解けてダラリとしたまゝ悠々と道を歩いたり、田舎ではネクタイをしている人にはすれ違う人が皆お辞儀をしたとか、背中にネクタイを垂らした新郎、新婦が神妙に歩いていたという様な状態であつた。

日露戦争の当時は蝶ネクタイの両側に日の丸と聯隊旗を模した柄物が飛ぶように売れたということであり、明治天皇御崩御の直後は黒地のネクタイしか売れず、柄物ネクタイを黒に染め換えたということである。

大正初年の経済界の不況に伴つて、折角順調な発達をして来たネクタイ業界にも秋風が吹き初めた。当時のネクタイ業界の大御所「南商店」では実に大胆な商策をとつてこの危機を巧みに乗りきつた。それまでの商標

「BM」印を変えて「赤帽」印と称し、正月の初荷のとき真赤なシルク・ハットにモーニングといういでたちで荷馬車に乗り込み、楽隊を先頭に銀座をとばした。又従来は柄の良し悪しで、値を定めて更に多少の掛値をつけて売値としていたのを正札販売及び均一販売を始めたところ、これが当つて繁昌し、やがてネクタイは柄で値を定めるのではなく、品質によつて定める商慣習をつけた。その頃になると人々のネクタイへの関心は大分強くなつて裁断と縫製に改良を加えた。即ち巾ダービーの流行とともに四五度のバイヤスに裁断することの良ろしきを知り、又純毛の芯地を使うことも知つたのである。こうなると従来の小巾物では裁ち合せが巧く行かないので必然的に一八吋巾、或いはそれ以上の巾の生地が織られることとなつた。又芯地もネルや麻芯が皺になり易いので尾西地方で純毛ガリ毛を別織させることに成功した。

大正初年の不況時代には人絹糸を使つた編タイ（Knitted Tie）が市販されたが正絹に比べると価格がウンと安いので（正絹タイ二円・人絹タイ三十銭）俄然「紋織タイ」や「プリント・タイ」を圧した。即ち「角型ダービー」がこれである。然しこれも昭和二年の春を最後に姿を消した。

やつとのことで不況時代が過ぎたと思うと大正十二年の関東大震災は日暮里を中心とした紋織ネクタイ工場及びプリント染のネクタイ工場は潰滅の有様となり、ひとり八王子のみとなつたのが今日八王子機業地繁栄の基礎をつくつたのである。そして関東及び西陣の「紋織ネクタイ」は本場のフランスにもさかんに輸出され、立派な業績を残したが、昭和十五年七月七日の「奢侈品禁止令」の企業整備、続いて十六年十二月二十六日、「ネクタイ製造禁止令」によつてネクタイの生産は完全に止つた。

やがて戦争も終り、服飾の復活は日とともに著しく進んでいつたが一度禁ぜられたネクタイの進出は遅々たるもので、先ず最初は和服の残り布や洋服の古い生地で作られたのが町に出はじめた。その頃密輸の洋服地で作られたウール・タイが最も人気を呼んだが、後に記す毛織物の重苦しい感じや、結び目がふくれる煩わしさ、更に一本千六百円もの高価な点が、ウールタイの命を短くしたものと思われる。

昭和二十四年六月、生糸の統制解除とともに、再びネクタイの生産は始められ、一九一五年の生産本数は約八〇〇万本で、今日では約一、五〇〇万本となつている。

戦後十二年を経過した今日の服飾界は、各方面に亘つて隆盛を極めているが、殊に男子の服飾品として最も高い価値を示すネクタイへの関心は色彩感覚の発達と相俟つて強くなつて来た。そこで業者間に於いても熱心な研究が続けられ、改良に改良を重ね、品質、染色、デザインともに優れて来た。その上洋服とのコントラストも考えられ、その年々のネクタイの流行は背広の型、ワイシャツのカラーの型等との関係も見逃すことは出来ない。即ち近年の背広のラペルの巾が狭くなつているので、従つてネクタイの巾も狭くなつて来ている。これと同じように色の流行も上着の色と密接な関係を持つている。又家庭では手芸品としてローケツ染や、描更紗等趣味のネクタイが旺んに作られているのは潤いのあることである。

四、分類及び種類

ネクタイを材料、組織、形、用途の上で分類して順次説明してみる。

一、材料による分類

- 糸
  - 絹
  - 羊毛
  - 化繊
  - 合繊
  - 木綿
- 皮

◎絹タイ

ネクタイの代表的なもので最もオーソドックスなものである。戦前高級品はイタリー、フランス、イギリス等の西欧諸国から生地として輸入されていたが、最近では西陣や八王子あたりで織られたものが輸出されている。絹タイが広く使用されているのは tie としての特性が揃つているためであるが、値が高いのでだんだん化繊に圧されて来た。

◎ウールタイ

イギリスが本場で、我が国でも戦前から見られたが微々たるものであつた。戦後生糸統制廃止までの空白時代やゝ用いられたが、ウールの生地自体がネクタイの特性にふさわしくないのであまり愛好されない。最近ローケツ染などのプリントタイの生地に用いられている。

◎木綿タイ

柄出しの木綿タイはみられないが、ローケツ染や、描き更紗等手芸ネクタイの生地に木綿のブロードが用いられている他はあまり見受けられない。

◎ **化繊タイ及び合繊タイ**

アセテートのものが近頃次第に流行している。これはこの繊維の持つ特性が絹に近いためである。其の他人絹、ナイロン、サラン、アクリル系の繊維等が混紡されたり、交織されたりしている。何れも耐皺性等良好で値段も安いので絹タイに匹敵して来た。

◎ **皮革ネクタイ**

近年の服飾界に皮革製品の新しい進出が目を引く。或るデザイナーはハンターラインと称する型を発表した程で、男子の世界にも皮が用いられるのも当然の事と思われる。然し革は布と違って価格も相当するので、部分的に用いられる方が妥当であるとすれば、先ず男子ならネクタイということになるであろう。更に前述したように手芸ネクタイとして皮染めが盛んに行われている。スポーティなものによく、ゴルファーやハンターに喜ばれることと思う。

二、組織による分類

- 織
  - 平織
  - 綾織
  - 朱子織
  - パイル
    - 紋織
    - 右の組織を応用したもの（畦、蜂巣、ハックアバック、梨地等）
- 編
  - 鉤針
    - 丸型
    - 平型
- 組
  - 平打

（付）染ネクタイ

- 染
  - 無地
  - プリント
  - ローケツ

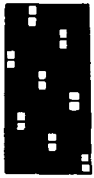
(1)　織ネクタイについて

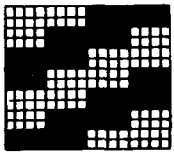
紋織が主で、その他朱子織、平織（縞格子、九重織）等がある。地組織はネクタイ地の適、不適を定めるものである。

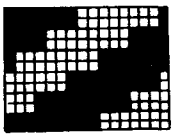
◎斜紋織

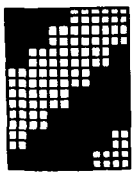
斜紋織について少し詳しく述べて見ると、斜紋織は外観、手触りともによく、その代表的なものが第8図である。第9図、第10図は斜紋線を変化させたものである。経朱子の中でも八枚朱子は生地の外観がよく、完全数が地組織として好都合であるため、最もよく使用される。（第11図）但し太い緯糸で緯密度の小なる場合では八枚朱子は経浮きが長くなつて見苦しくなるので五枚朱子が用いられる。反対に細い緯糸で緯密度の大なる場合は外見が斜紋のようになり、光沢がないので十二枚朱子が用いられる。十六枚朱子はかなり細い緯糸の場合に、二十四枚朱子は経糸と同じ位の細い緯糸を使用する場合に用いられる。其の他蜂巣の一種で手触りよくするため、経のみの現われるところに平組織を入れたもので、地がふわふわになり過ぎるので他の一部分に変化ずけるため使用される。又織物の表面に凹凸をつけ、立体感を見せるものもある。

◎縞　柄（平織）


第11図


第10図


第9図


第8図

ネクタイの柄の中で比較的多いのは縞柄もしくは格子縞である。昔はこの縞柄の縞の方向はネクタイの右上から左下へ走るものばかりであつた。しかし現在ではその反対の柄も時々ある。この割合は筆者は調べたわけではないが、大体の感じとして右上から左下への縞の二割位だと思う。右上から左下へ走る柄は緯糸の色糸によつて出来る。このように緯糸で出来る縞を業界では「段」と呼んでいる。そして経糸の縞より緯糸の縞の方が造りやすいといおうか、次々に変化した縞柄が出せるので、縞柄が右上より左下へ行く柄が多いのである。

◎九重織

平織組織を応用した手芸用ネクタイ織で「九重」という人の発案によるので此の名がある。主として毛糸を用い、縞、格子、絣等、色の配色が自由でなかなか風味あるものが出来るのと、織機が小さく場所をとらないので一時は大流行した。欧米の百貨店で講習会を開いたところ、忽ち人気を呼び、あちらでも流行したということである。

◎パイル織（ビロードタイ）

昭和二十七年頃西陣を主として作られた。最初花緒のビロードを用いたところ、光沢の陰影が芸術的な美を構成し、人気があつたので更にネクタイ用の生地が特別に織られたが、結び難い欠点と高価なため一般化されなかつた。

(2) 編ネクタイについて

鈎針編や機械編等がある。鈎針編には純絹の穴糸や、レース糸、毛糸等を用いるが、機械編には人絹や交織、化繊等がある。織物に比べて軽快なスポーティな単純味はあるが機械の性能上、多様な地風を表わすことは難しい。柄を出すにはタック編（鹿の子編）を主に用い、首になる部分は平織にて細くする。近年ナイロン等の化繊の材料で編まれたネクタイは夏の暑い時には涼感を感じさせるので喜ばれている。

(3) 組ネクタイについて

これは用いられる割合が非常に少ない。巾を変えるために場所によつて密度を変えて組まれるのでネクタイのように巾に変化のあるものには適しているように思われるが、あまり市場では見られないようである。

(4) 染ネクタイについて（プリント・タイ）

織物ネクタイの変化には限度があり、その色彩も機械の性能によつて制限を受ける（いま我が国にあるものでは最大七色）。そこで自由な色と柄を表現するためにプリント・ネクタイが生れた。紋織の重苦しい感じに比べてプリント物は軽快な感じがするので夏の暑い時季には喜ばれる。最近ローケツ染や手描き更紗の流行がさかんで趣味のネクタイとして好評を得ている。

染ネクタイには無地物もあり、上着と同色又は配色のよい無地物は柄物より却つて粋なものである。表、裏を配色のよいので染め分けてあつたり、小剣と大剣とを別々に染め別けたりしたものもある。

三、形による分類

ネクタイを形の上から大別するとダービータイ（Derby Tie）とボータイ（Bow Tie）に分けられる。

◎ **巾ダービー**（第12図）(1)

背広用として一般に用いられる。原名は前述の如く Four in Hand でダービーとはダービー競馬から来た呼び名である。従来のタイの裾口は三角に切つた九十度の角をなし、巾、長さとも一定であつたが、二十六—二十七年頃より変形し、巾は狭く、丈は長くなつている。一例を示すと、

		（丈　吋）	（巾　吋）
ダービー・タイ	二十六年頃まで	四五—四六	三½—四
	三〇年頃	四八—五〇	二½—二⅔—三
	三〇年頃（外人用）	五〇—五二	
角タイ	三〇年頃	四八—五〇	二—二½

変形タイとして

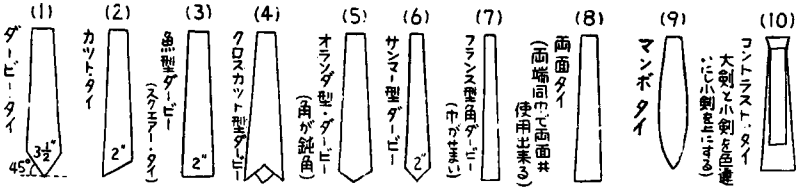
カット・タイ（Cut Tie）（第12図 (2)）

スクエアー・タイ（Square Tie）（〃 (3)）

クロス・カット・タイ（Cross Cut Tie）（〃 (4)）

（オランダ型ダービー（Derby Tie）
ドロップ・タイ（Drop Tie））（〃 (5)）

第12図



サンマー型ダービー（Summer Derby Tie）　(6)
フランス型角ダービー（Franch Square Tie）　（〃　(7)
両　面　タ　イ（Duble Tie）　（〃　(8)
マ　ン　ボ　・　タ　イ（Mumbo Tie）　（〃　(9)
コントラスト　・　タイ（Contrast Tie）　（〃　(10)

◎ **ボー・タイ**

蝶結びにしてつけるネクタイで一本の長い紐（生地が伸縮する必要がないので布をバイヤスに取らない）で自由に結ぶものと、作りつけのボーがついているものがある。長さは三〇～三五吋、巾一～二吋で先は鈍角や直角などのもある。（第13図(1)(2)(3)(4)）

◎ **ワンス・オーバ**（Once Over）

一名ストックタイ（Stock Tie）両端が同一巾で三～三½吋で、結んだ形が蟬形に見える。ベルベットや絹でつくられたものは婦人物にも用いられた。

◎ **ボヘミアン・タイ**（Bohemian Tie）

巾六吋、長さ四七吋位で周りを細く三つ折にしてあるネクタイである。この名前はボヘミア人（現在のチェコスロバキア西部の住民たち）が使用していた

ところからこの名がある。又ボヘミアンと云う言葉は自由奔放な生活をする人という意味もあつて芸術家達に愛好される。

◎ **ノッチド・タイ** (Notched Tie)

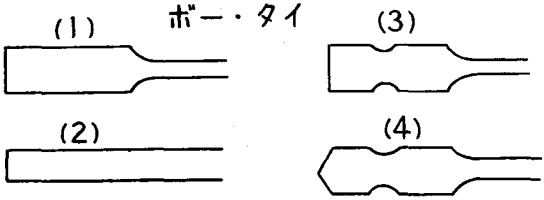
一名バタフライ (Butterfly) ともいゝボータイの一種で両端が矢羽根状になるのでこの名がある。巾は二½吋) 位。

◎ **セーラー・タイ** (Sailer Tie)

水兵服等に用いられるもので形は巾タイのように引結ぶものと、スカーフのように三角布の先端を結ぶのとの二種がある。今日でも各国々の海軍の制服に、或はボーイ・スカウトの制服に用いられ我が国では女子の服飾ネクタイとしては此の形が最も多く用いられている。

第13図

ボー・タイ



◎ **ウインザー・タイ** (Windsor Tie)

黒絹で帯状にバイヤスで裁ち、その周囲を三つ折に始末をしてある。主として子供が蝶結びにして用いる。ボヘミアンタイに似ている。

◎ **ウイングー・タイ** (Wing Tie)

蝶ネクタイの一種で、とくに端が拡つているのをいう。

◎ **タイ・フロント** (Tie Front)

作り附けで、結ぶ手間を省き形が崩れないように工夫したもので結び下げと金具留式の蝶タイで明治から大正にかけて我が国でも流行したもの。

◎ **ネック・ストック** (Neck stock)

十八、九世紀頃に着用された頸にきつちり固く折りたたんだネクタイのことで、頸の後でバックルによつて留めるようになつている。

◎ **コード・タイ** (Cord Tie)

細い紐状のタイのことで前で蝶結びにする。ウエスターン・タイ (Western Tie) 又はパーキー・ボー (Perkee Bow) とも云われている。

四、用途による分類

ネクタイとコートは常に密接な関係を持つているがコートの着用目的に応じてネクタイもそれぞれ異る。殊に儀礼的なものに就いては既に規定されたものもある。

	ビジネス又は昼間略式正装	昼間正装	夜間略式正装	夜間正装
スーツ	シングル又はダブルの黒又は紺の背広。折返しなしの縞ズボン	黒又は濃鼠のモーニング、シングルボタンのもの折返しなしの縞ズボン	シングル又はダブルのタキシード。ズボンは両脇に縞の入つたマッチするもの	黒又はナイトブルーの燕尾服。それにマッチする縞のズボン
ネクタイ	オープン・テンド又はボウ柄、ストライプの普通のボウ・タイ	黒、白、灰の縞柄物	黒の蝶タイ	白の蝶タイ

	カントリーウエアー
スーツ	シングルのプレーンな上着（チェック・ツィード）ノーフォーク・ジャケット
ネクタイ	編タイ　ウールタイ　皮タイ

五、製造法

一、製織工程

経糸―撚糸―染色―糊附―繰返―整経
緯糸―撚糸―染色―管巻―――――
（製織）

の順序で行われる。

原糸は、絹糸、絹紡糸、人絹糸、作蠶糸、綿糸、毛糸、亜麻糸、金銀糸、添糸等の原料別の他、飾撚糸等も用いられる。

織機は手織機、力織機何れも使用され、広巾、小巾両織機共用いられている。手織のものは柔くてむつくりした雅味がある。これに比べると力織機を使用したものは硬い感じがするが生産能率の上から云えば力織機の方がよい。

織物の密度は曲尺一寸につき経が三二〇～四四〇本、緯が一五〇～二〇〇越位である。織物の巾は次のようである。

一六～一八吋……小巾
二四吋……中巾
三二～三六吋……大巾（広巾）

広巾物は織上り後半分に切断されるので、小巾がネクタイ生地としての標準巾であるが、能率上から広巾

で織られる。

二、仕　立　工　程

ネクタイはバイヤス地であるから、その仕立には充分な注意が必要である。先ず生地の裁断については申すまでもなく、又折角生地が正しく裁断されていても縫製が不出来であると捩れる因となる。普通のものは生地の節約上二箇所で切継ぐ。

◎　裁断について

(1)　継ぎ目がカラーの下になるようにする。

(2)　大剣が正しく四五度のバイヤスに裁断する。第14図のAは市販のネクタイの最も経済的であるといわれる裁断図である。N_1（大剣B）N_2（中つ剣）N_3（小剣）はB_0C_0,B_1C_1; B_2C_2, B_3C_3において縫い合わされるものとする。N_1の中心線A_0A_1を正バイヤスの方向にとれば、A_0A_1, B_0C_0のなす角は45°であるが、N_2の中心線A_1, A_2とB_1C_1とのなす角　$\angle A'_1 \doteqdot 44°$、$B_2C_2$とのなす角$\angle A_2 \doteqdot 47°$, N_3においては$\angle A_2' \doteqdot 48°$, $\angle A_3 \doteqdot 42°$となる。従つてN_1を正バイヤスにとつても、N_2、N_3では正バイヤスにはならないため、これが捩れの現象を起すことになると考えられる。

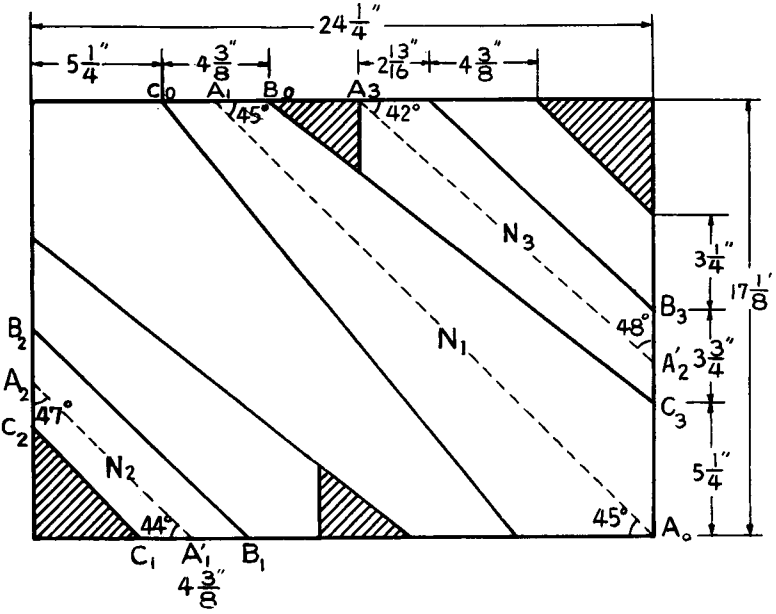
次にN_1、N_2、N_3を縫い合せたとすると図（第15図）において、それぞれの中心線は僅かの角度（約一度）の差で一直線とならないが（若し縫い合せがまづければこの差が大きくなることも考えられる）仮りに一直線であるとしても、前述の通りN_2、N_3は正バイヤスでないからネクタイの両端を持つて引張ると捩

れることになる。これはこの裁断法としては止むを得ないが、N_1はネクタイを結んだとき表に出る部分で、N_2、N_3はかくれる部分であるから、N_1を先ず正バイヤスにとる事は正当なことと思われる。

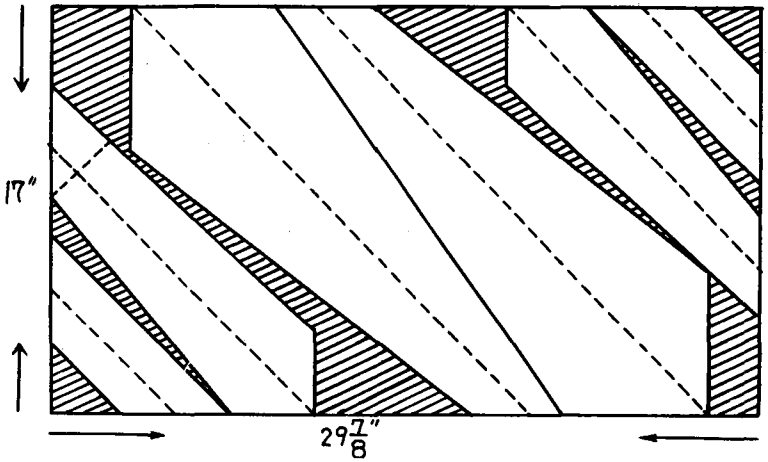
次ぎにB図をみるとA図に比べてA図の欠点を補つている。即ち三片の各々が四五度の正バイヤスになるがAと比べて非常に無駄な布地が多い。理論的に云えばAよりBの方が捩れが少ないのでネクイタとしては良質とみなされなければならないが後述の実験にもあるように密度の関係等もあり、不経済な点を敢えて辛棒してまでBの裁断にする程のことはなかろうと思われる。

◎ **縫製について**

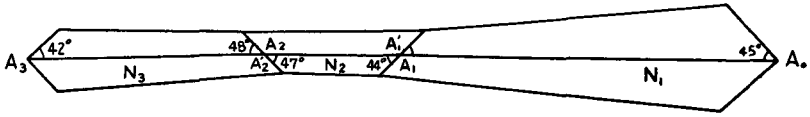
（第14図）A



（第14図）B



（第15図）



(1) 大剣と中継ぎ、中継ぎと小剣をそれぞれ○・五糎の縫い代で縫い合せ、縫代を割る。（第16図A）

(2) 大剣を三角の尖った端から二十三糎、小剣は同じく端から十八糎の所に○・五糎の切込みを入れ三つ巻きにする。三つ巻きの太さは業者は上物五厘目（○・二五糎）並物一分目（○・五糎）とする。三つ巻きの代りに此の部分へ配色のよい布地を裏地としてつけてもよい。（第16図B）

(3) 巾を中表に二つ折りとなし、切込みから切込みまで○・五糎

の縫代で縫う。この時捩れを特に注意すること。縫代は片返し。（第16図C）

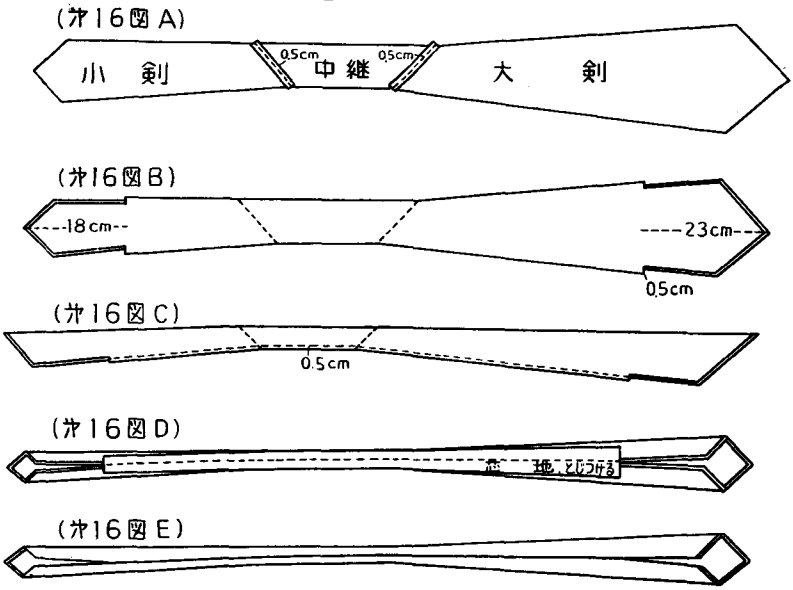
(4) 芯地を縫代にとじつける。（第16図D）

(5) 表に返しアイロンで形を整える。（第16図E）

六、織物の引張方向による伸びの比較

ネクタイの引張方向による伸びについて試料として絹ネクタイ地(A)アセテートネクタイ地(B)を選び、これらをそれぞれ経糸方向、経糸に対し0°, 22.5°, 45°, 90°（経糸方向）（0°は経糸方向、90°は緯糸方向に引張つたことになる）の方向に引張り、その伸びを測定すると第一表、第二表の如き結果を得る。表中

縫製説明図

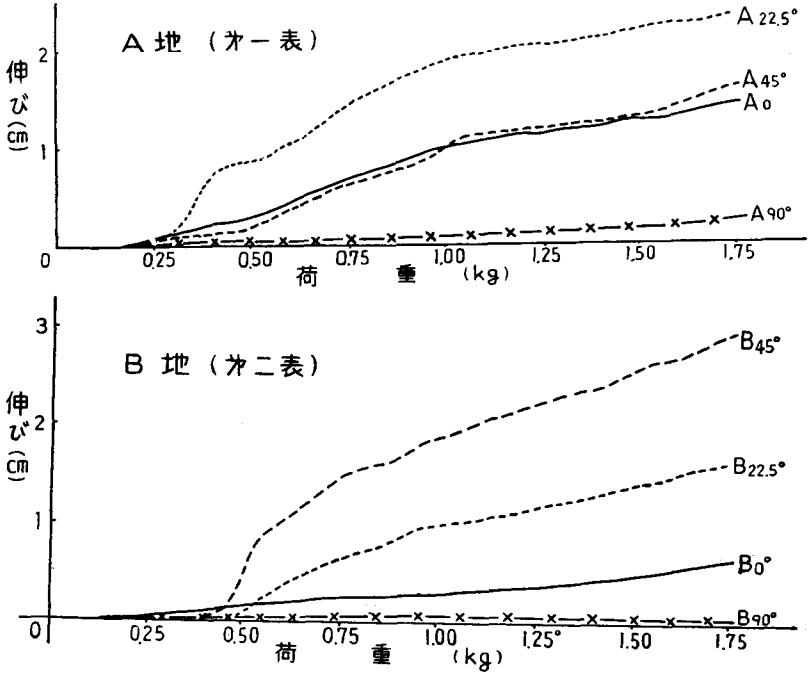


A_0, B22.5°, B45°, B90° はB地についての伸びを示すものである。

この図から考察すると

(1) 引張力が零から次第に増すと伸びは急激に増加するが、ある張力以上になるとその増加率が少し低くなる傾向が見られる。これは前者は主として組織上の伸びで、後者は糸自体の伸びと解される。但し A_0°, A90°, B_0°, B90°, に於いてその段階の変化が殆んど見られないのは、糸自体の伸びが主で組織には余り関係のないことを示すものである。

(2) A_0°, A22.5°, A45° と引張角度が増すにつれ、段階が明瞭にわかれ、組織による伸びの限界が大になつているのは次節に述べるようにその密度の関係がある。



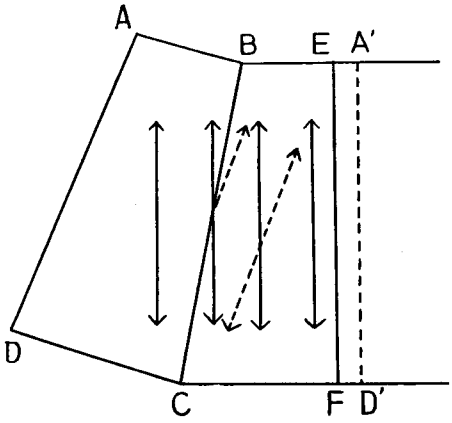
(3) A22.5°, A45°, B45° とではその伸びの大きさが反対になつているのは、即ち経、緯糸の太さ、強伸度、その織物の密度、糸の張力などによつて引張り方向四十五度が必ずしも最大の伸びを示すとは限らない。

七、ネクタイの捩れ

ネクタイの両端を持つて引張ると、途中で捩れるものであるが、これはネクタイを締めるとき結び目から垂直に垂れるべきものが捩れるようになるものである。このようになる理由は種々あると考えられるが、次の諸点を挙げて見る。

(1) ネクタイの表と裏について、その伸び易い方向から捩れを考察すると第17図に於いてABCDは裏半分を、BA′D′CはBCを折り目として折り返した位置を、BEFCは表地半分を表わすものとする。一枚の生地であるから、その最大伸びの方向は表裏共に同方向であるが（これを実線矢印で示す）ABCDを裏に折り返した場合はその方向はBCを対称軸として斜線矢印の方向となり、表地BEFCの実線の矢印と急に変つた方向性を持つようになる。即ちネクタイの表と裏とでは伸び易い方向が異るので引張る

（第17図）



と折り目を境として捩れるのである。

(2) 一枚の生地から大剣、中継ぎ、小剣を裁断するとき、それぞれの伸びの方向を異にする結果、これを仕立てたとき全体として伸びの方向が一致しないため、捩れを起すことになる。

(3) 仮りに、それぞれの伸びの方向を同一にしてあつても継ぎ合せた二部分（大剣と中継ぎ、中継ぎと小剣）の角度の相異より捩れを起すことがある。

(4) ネクタイを使用していると、結び目の所で捩られるので、その癖がついて解いたときに中央の所が捩れた状態となる。

(5) この実験の結果より（考察）ネクタイを仕立てるとき、三つ巻きの部分を多くして裏側を明けておく方がよいということが云える。

八、結　び

以上ネクタイの各面に亘つて研究して見た結果、筆者が最も関心を寄せていた捩れと裁断法についての問題は実験で示す如く、如何に緻密な注意をもつて正確に裁断されても捩れの出ないネクタイは絶体に作り得ないということが証明された。従つてネクタイを作るに当つて捩れの点よりも、むしろ経済的な面を考えた方が利口であるということが出来る。即ち良質のネクタイとは比較的捩れの少い、然も経済的な裁断法（第十七図）で裁断されたものを、巧みな縫製技術で縫製されたものであるということが出来る。勿論生地や芯地の地質等も忘れては

ならない。即ち良質ネクタイの条件として次の諸点が挙げられる。

(1) 皺にならない。(特に地質、織り方等をよく調べる)

(2) 結び目が大にならない(地質とワイシャツのカラーの開きとの関係を考慮すること)

(3) よく締ってそして解き易くもあるもの。(生地の材料、組織が関係する)

(4) 手触りがよく、適度の重量感を有するもの。(あまり薄いものは軽薄な感じがする)

(5) 良質の芯地(毛芯)が使ってあるもの。(芯地の伸縮度は必ず表地より大であること)

(6) なるべく捩れの少ないこと。(ネクタイを選ぶとき両手でネクタイの両端を持って引張って見る)

(7) 縫い方は成可くは手縫いがよい。これは捩れることが比較的少いからで殊に芯地と表地を一緒にミシンで縫ってあるのなどはよくない。

以上の諸点は良質なネクタイとして必ず具備していなければならない条件である。即ちこれらは織物の弾性的性質、重量、厚み、摩擦係数等から判定出来よう。

然し、普通ネクタイを購める一般の人たちは、これらの条件よりも寧ろ、色や柄やデザインに主きを置いていることは見逃せない点であり、ネクタイの服飾価値としてこれもまた大切な事柄である。

【参考文献】

1 繊維工業学会誌
ネクタイについて

2 紡織界
3 紡織界
4 科学朝日
5 Dress Making
6 婦人公論大学 服飾編
7 図解服飾事典
8 実業之日本
9 洋装
10 洋装
11 国際羊毛事務局資料

（本学助教授 被服学）